# 皇龍寺建立と運営に関する考察

李 恩 碩

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．王城における皇龍寺の位置
Ⅲ．結語

**要　旨**　真興王が新たな王宮の建設を試みたのは、強力な王権を構築するための新たな世界、つまり自らが天子の役割をするという意味を掲げることであった。王宮建設は、都市計画の出発点であり、中心地であった。王宮は中国の都城計画の概念を借用したものであったが、新羅特有の都城として発展することとなる。

真興王が黄龍出現を契機として王宮から寺院に変更したことは、仏教を国教として定め、「王即仏」思想を具現するにあたり、より適したものであったと考えられる。皇龍寺建設は、新羅社会の大変革を引き起こす大事業であった。

寺院建築において、中国や日本ではみられない一列配置の三金堂からは、真興王の意図を十分に推測することができる。中央金堂は丈六尊像を安置し、東金堂は皇太子のための東宮の意味を付与した施設として、西金堂は自身のための施設として造成された。

しかしこのような構図は、真平王の代になって完成したと推測される。真智王退位後、長子継承の正当性と王権強化の結晶である天賜玉帯を保管する場所として、西金堂がその役割を果たしたとみられる。

芬皇寺は善徳女王のための寺院として建立されるが、女性という限界－釈迦族の公主であるため、東西金堂は中央金堂より一段格下の姿である「品」字配置の形で造成された。しかし聖骨系が途絶えると、以後新羅社会においてこのような三金堂配置は造営されなかった。

絶対王権の象徴を示す皇龍寺中央金堂には丈六尊像を、東金堂には小組丈六尊像（あるいは薬師如来仏）、西金堂には天賜玉帯を奉安することで「王即仏」思想を具現した。そして善徳女王代の645年に造成される九層木塔は新羅三宝として、皇龍寺の完成を示す、新羅都城においてもっとも重要な場所であることを証明するものである。

キーワード　皇龍寺　三金堂　天賜玉帯　芬皇寺　皇福寺

---

国立羅州文化財研究所

## Ⅰ．はじめに

皇龍寺は新羅の歴史上、都城、寺院、政治の中心地であり、その重要性についてこれ以上言及する必要がないほど、新羅史研究において重要な位置を占めている[1]。皇龍寺の造成は、古代都市中心国家の誕生を知らしめる重要な位置にある。502年の殉葬禁止、520年の律令頒布と百官の公服制定、527年の仏教公認、536年の建元年号の使用、最初の伽藍をもつ544年の興輪寺の造成など、６世紀代の新羅は大きな社会的変化が生じた。

６世紀代の中国の変化、すなわち20～30年周期で繰り返された国家の成立と滅亡、そして仏教の拡散は、東北アジア全域に大きな影響を及ぼすこととなる。よって、553年の真興王代の漢江下流域の占拠と、新宮すなわち皇龍寺建設という大事業は、当時の東北アジア各国における首都建設という大きな機運と軌を一にするものであった。真興王代の新宮建設は、単に宮廷建築というだけでなく、古代都市築造、特に方格化した新都市建築と合致しながら、基本的な概念と制度を受容することになる。しかし、地形的・地理的特性のみならず、従来の枠組みを維持しつつ独創的な要素が加味されることで、新羅式都城制が発展し、統一新羅時代まで継続的に都市の範囲が拡張する。その中心に皇龍寺が位置しているのである。

しかし、皇龍寺の発掘から40年以上が経過したが、南広場・都市遺跡へとつながる地域はようやく調査され、その様相解明への糸口が紐解かれているところである。皇龍寺東方の都市遺跡は発掘によってその構造がある程度あきらかとなったが、芬皇寺との境界地域である北方や西方地域の場合、境界区域の発掘がいまだ正式におこなわれておらず、皇龍寺との関係を正しく解釈できずにいる[2]。

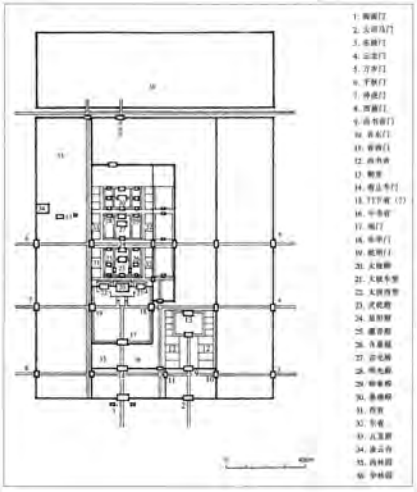
2000年代以降は皇龍寺の復元研究をはじめとして、都城との関係など、数多くの学術大会が開催され、多様な論文が発表されたが、三金堂の造成事由とその背景、都市構造との関係など、核心的な部分は解決されていない。よって、本稿ではこれらの問題について新たな視点でアプローチすることとする。

## Ⅱ．王城における皇龍寺の位置

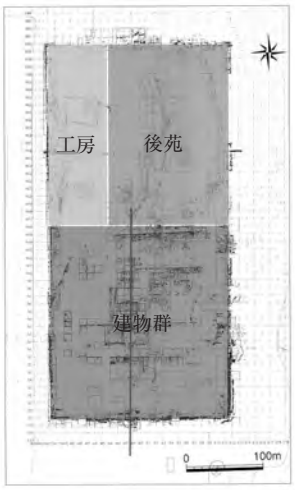
### １．都城の中心・皇龍寺

６世紀から三国は中国の都城体系を受容するとともに、王宮を中心とした区画都市構造を備えてゆく。この点に関する研究は既に多くの蓄積があり、筆者も新羅王京の構造については何度も発表しているため、ここで簡単に言及したい[3]。

王京の造成は、皇龍寺を中心に１段階の都市計画が進み、以後、南北に市街地が拡大してゆく様子は、継続的な発掘を通じて証明されている。以前、皇龍寺の中軸線は金堂の中



**第１図　北魏洛陽宮城復元図**
（傳熹年主編2003）




**第２図　王宮里遺跡配置構造図**
（배병선2014）

心台座から16.8 m程度西に偏る、すなわち、金堂西部を中軸線が通ることから、建物群の全体配置は東へ偏っており、このような構造は、中国南朝の宮城構造とは反対であるが、北魏洛陽城の宮城概念を受容した可能性が高いと指摘したことがある[4]。裵秉宣は、中国の偏向的な都城構造が益山王宮里遺跡にも影響を及ぼしたとみており[5]、新羅都城もこれを受容した可能性を示した。

つまり第３図を詳細に検討すると、月城と狼山間の地割配置で、一坊１／２以上が西方

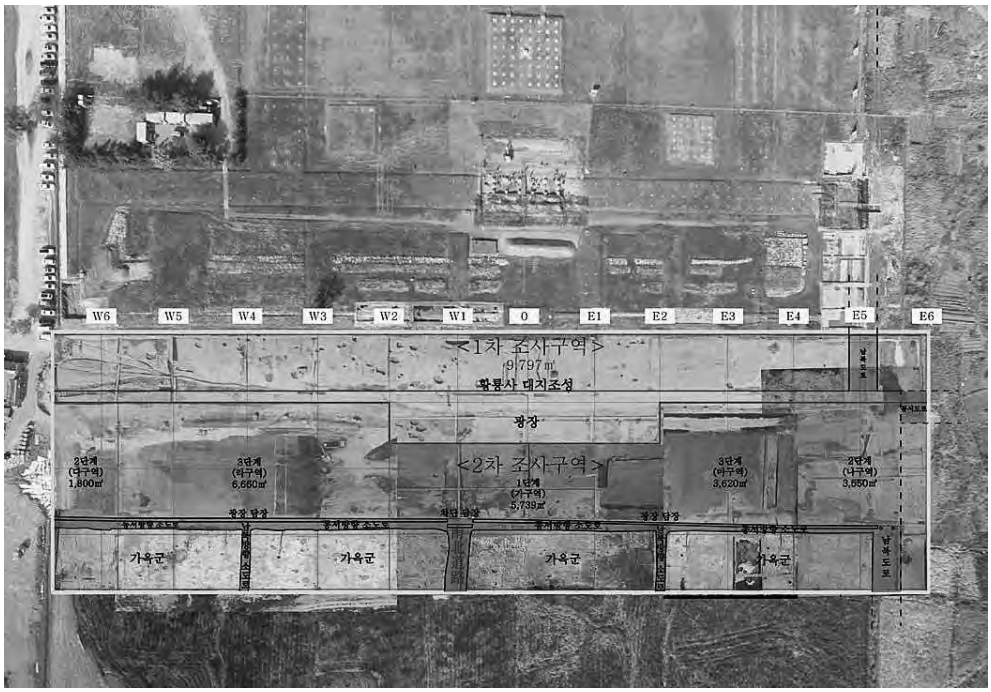
**第３図　慶州における都城１次計画図と西へ偏った状態**（李恩碩2016）

の月城に偏っている。これは都市計画の全体的なプランが西に偏っているという点を如実に表わす一方、偏向的な構造を受容した可能性を示している。

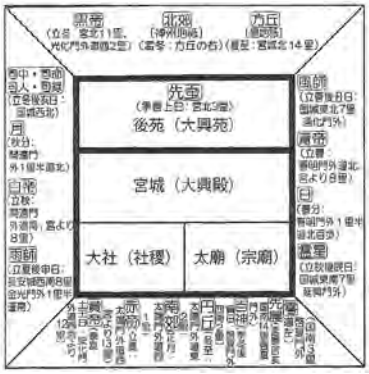
くわえて以前から指摘されてきたように、朱雀通の性格をもつ皇龍寺南方中央の南北道路が中門と南門の中心軸上で取り付かず、西に偏った位置で取り付く点は、示唆するところが大きい。これは、既存の新羅都城の構造を復元する際に常に問題になってきたことで、朱雀通の存在有無を示す非常に重要な要素である。

2015年からは、新羅文化遺産研究院が皇龍寺南方地域を発掘している。その結果、皇龍寺の中心軸線から西へ約20 m地点で、皇龍寺建立時期と関連する南辺東西道路と交差する中央南北道路（朱雀通の役割をする幅約13 m）が１段階で築造されたが、改築ののちに埋め立てられ、AD700年頃に造成された新たな広場遺構を遮断する塀の南方へ再度改築し、取り付く状況を確認した[6]。

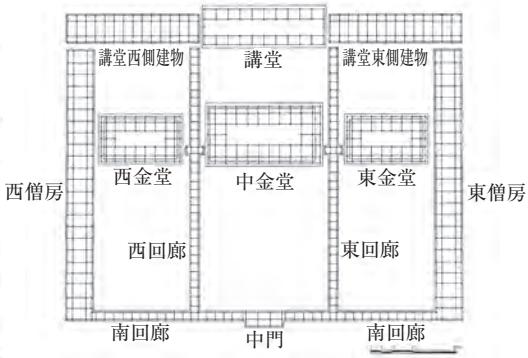
つまり第４図をみると、今の南北道路は皇龍寺全体の中軸とはあうが、皇龍寺の中門－塔－金堂（仏殿）と造営方位を揃えていない。造営方位をずらして築造していたのだろうか。このような例は、益山王宮里遺跡でも正殿と中門がずれて配置されており、注目する必要がある。南－北子午線にあわせて王宮を建設する過程で、南北軸の定直線上に大門－正殿を正南方向に一直線上に配置すると、「神への反抗」の意味をもつことになる。このことは、皇龍寺が当初、新宮建設計画のもとで築造され、その後も維持されていたことを




**第４図　皇龍寺南方遺跡の構成**（新羅文化遺産研究院提供）




第５図　都城の儀礼空間－隋の大興城モデル
（妹尾達彦2011）




第６図　６～７世紀における皇龍寺の伽藍配置
（김숙경2020）

示している。

以上から、皇龍寺の配置と基本的な都市構造を備えるために、思想的背景と理念を反映した都城の築造がなされていたと理解することができる。つまり、天神と地神に王権の正統性の承認を受けなければならず、これにともなう儀式空間が配置されなければならない[7]。第５図に示すように、王宮を中心に、周囲には礼儀空間を所定の位置にあわせて配置しなければならない。現在の慶州西方に位置する蘿井が宗廟と同様の役割を担う奈乙神宮とはなりえず、鶏林北方の建物についても複数の解釈が提示されているが、宗廟の役割を担っていたとみるのは難しいだろう[8]。

## ２．なぜ三金堂なのか

『三国史記』と『三国遺事』には、真興王が新宮（紫宮）建設を試みたが、その地から黄龍が現れたことから、寺院に変更したという記事がみられ、この解釈に関しては研究者間で異論はない。黄龍は四方を護衛する四神（東－青龍、西－白虎、南－朱雀、北－玄武）の長であり、皇帝の権威を象徴する[9]。ところが、『三国史記』では「王が黄龍が現れたことを不思議に思い（王疑之）、寺に変えて皇龍」とし、『三国遺事』には、「将来、紫宮を龍宮南方に建てようとするが、黄龍が現れたため、これを改め寺を造って黄龍」としたとある。最終的に寺院に変更したという内容は同じだが、そこへ至る過程はまったく異なっていることを類推することができる。

第一に、黄龍が現れたことを不思議に思うという意味は、真興王はまったく予想していなかったが、黄龍の出現を契機として天命を受け、天下を治める支配者となるという意味として、「皇」字を使用するものである。これは、真興王が天命を受けざるをえない、すなわち、計画していなくても当然のこととして、皇帝の地位を天が与えてくれるという意味だと理解することができる。かなり意図的な文字の選択だといえる。

第二に、龍宮[10]の存在、すなわち龍が既にいる地である南に宮殿を建て、黄龍が出てく

るのを待っていたか、予想して建設を進めたが、龍が現れるとすぐに「黄龍」と命名したというものである。これは、真興王がすべての状況を緻密に計画して進めたと解釈することができる。狼山と月城間の中軸線をあわせるとともに黄龍の出現をも考慮したとすると、真興王が意図的に寺院建立を推進したのではないだろうかという推論も可能である[11]。

真興王は新宮（皇龍寺）建立とともに、内部的には王権強化を、外部的には領土拡張を推し進め、自らを転輪聖王（世界を統治）と称し、王即仏時代を導いた[12]。息子に銅輪（26代真平王の父）、鉄輪（25代真智王）と名付け、釈迦牟尼の家系がそのまま転生したことを示した。真平王の娘、善徳女王の幼名もやはり、釈迦族の公主の徳曼公主であった。このような家系図をみると、黄龍が現れたということは、天下の支配者となることを自ら象徴することであり、また、寺に変更して建てたということは、すなわち、釈迦牟尼が住む場所を造ったということを表している。

では、王宮の基本的な概念を完備する地に皇龍寺を建て、三金堂はなぜ、どのような思想を反映して造成されたのかを検討することとする。

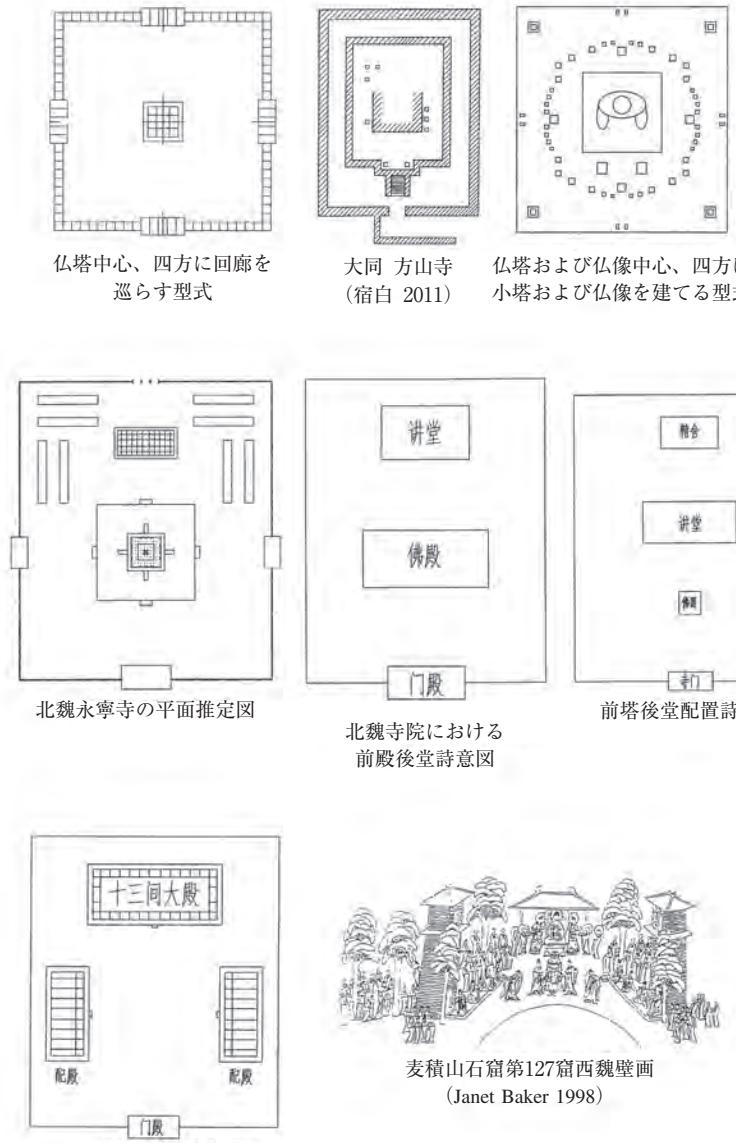
三国に仏教が伝来する４～５世紀初頭、中国[13]では仏教が大きく発展し、北方十六国地域に寺院893ヵ所が建てられた。南北朝期と隋による統一が成し遂げられた６世紀末までが、寺院建立の絶頂期であった。南北朝期には、仏殿の前に塔を建てて回廊を巡らせ、四方に門を備えた配置形態、仏殿の後方に講堂をくわえる配置形態が新たに登場する。双塔の配置も出現し、これは唐代における仏舎建築の平面配置の発展と定型化の基礎となったと考えられる。隋の文帝の時、中国全土には既に3,792ヵ所の寺院があったが、煬帝代には3,985ヵ所まで増加し、僧侶が236,000人いたという。唐の高宗の時には5,358ヵ所に達し、比丘尼は75,524人、尼は50,576人に及んだという。

仏塔中心の平面配置は「仏塔を中心に四方に回廊を巡らせた型式」、または「仏塔と仏像を中心に、四方に小塔や仏像を立てた型式」を呈することから、小乗仏教の影響下にあったことを示している。東晋南北朝後期に至ると、北魏の永寧寺のような前塔後殿として、北魏の『洛陽伽藍記』には「木製の九層浮屠１基と、浮屠の北に仏殿１棟があるが、形態が太極殿と同じ」だと記録されており、また、洛陽建中寺は前廳後堂の構造で、仏殿と講堂を順に配していた姿がみえるとある。隋代に入り、仏塔、仏殿、講堂を同時に造営した寺院は蘇州の重玄寺である。殿を建て、堂を建て、廊廡（回廊）と廚庫（台所）までを完備したという表現が残っていることから、皇龍寺の構造と基本的な概念を関連づけることができる寺院である。

ここから三金堂の構造を類推することができるのは一正二配の構造である。中央に正殿、その両脇に配殿を置く型式が隋代に既に出現しており、『法苑珠林』の記録によると、荊州寺の正殿は間口13間、東西脇殿は各９間と記述されている。また、一閣二樓の配置は、

中軸線上に高閣、左右に二樓を置くか、あるいは南閣北塔として、南に高閣を建てて塔を配し、北に北殿を配置する構造もみられる。そして一殿双塔は、隋の文帝が584年に建立した長安大雲経寺でみられるが、前殿後堂を基礎として仏殿前に左右対称の双塔を建てたものである。

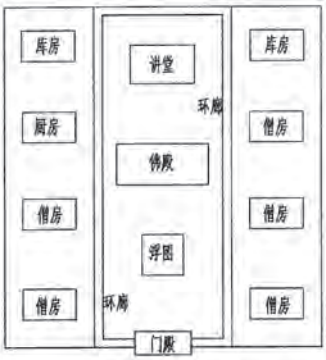
以上、中国の仏殿建築型式をみると、高句麗青岩里廃寺において、塔を中心に置き、北、東、西に仏殿を配した一正二配構造が日本の飛鳥寺まで続くことが三金堂の造成原理を示



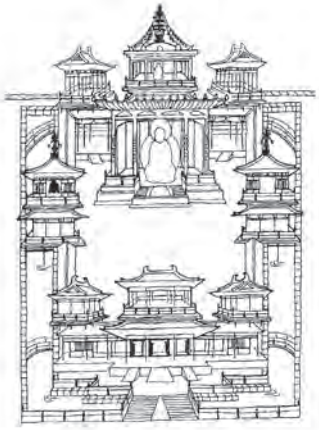

**第７図　古代中国の仏殿配置様式図１**（王貴祥2013から引用）

北魏天興元年寺院配置詩意図

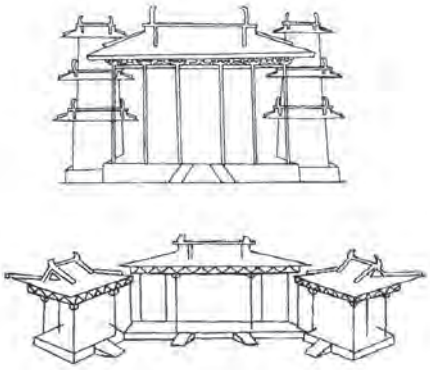
塔－堂－殿配置詩意図



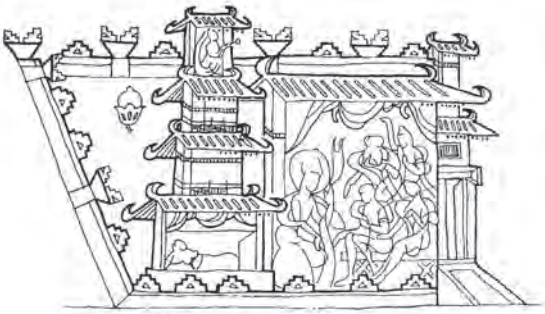

塔－殿－堂配置に回廊、僧房、厨庫を加えた配置詩意図



敦煌361窟南壁の阿弥陀経変にみられる仏寺双閣配置（蕭默2002）



敦煌莫高窟周代壁画にみられる一殿双閣型式（宿白2011）



敦煌莫高窟第257窟の北魏壁画中にみられる一殿二塔型式（蕭默 2002）

**第 8 図　古代中国の仏殿配置様式図 2**（王貴祥2013から引用）

す意味として解釈されている。

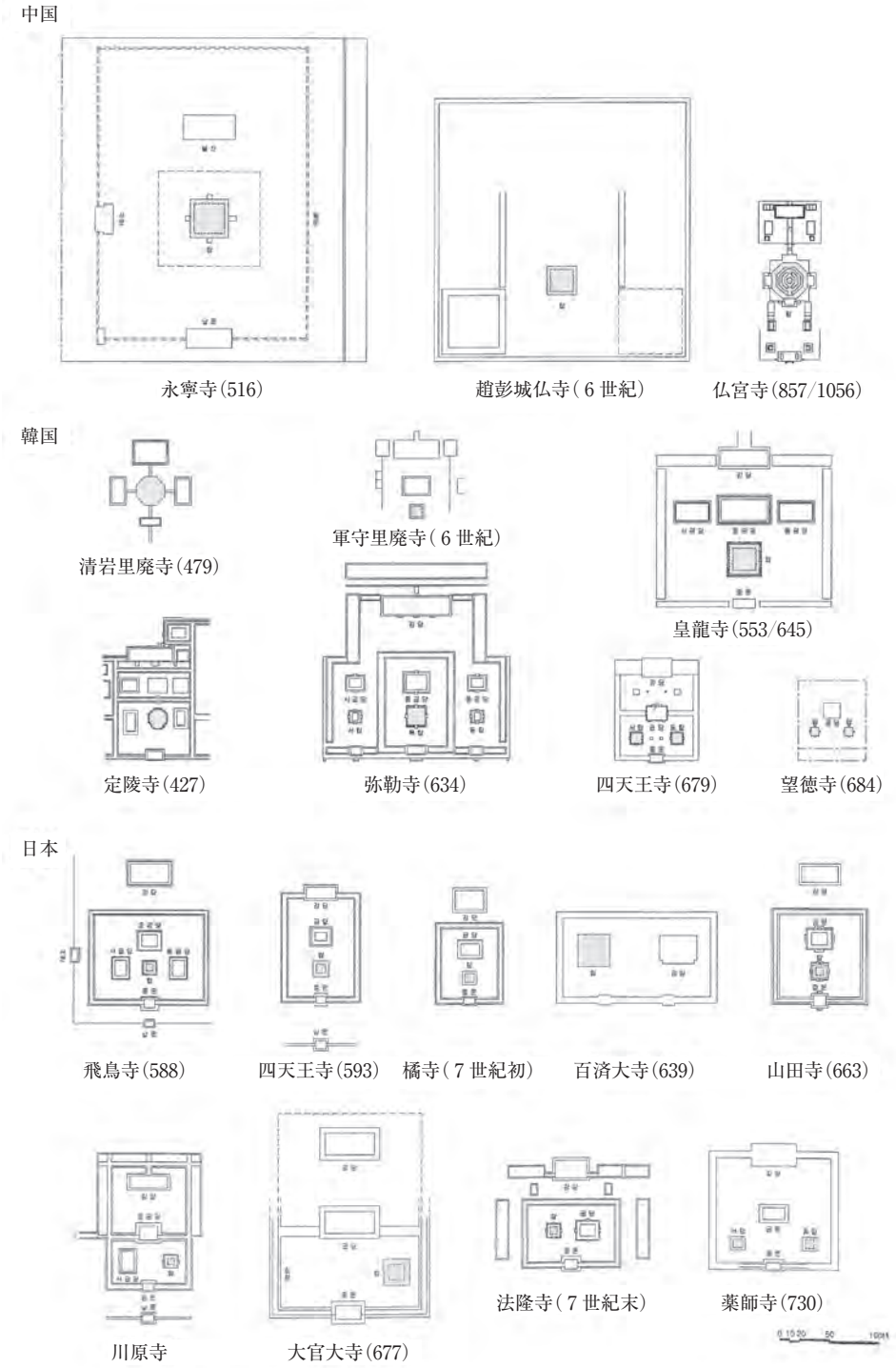
しかし皇龍寺の三金堂は上記の寺院とは異なり、西金堂－中金堂－東金堂の順に一列に配されている。東金堂と西金堂は台座跡がないことから、東、西金堂の一所には、東竺寺から迎えた小型三尊仏を、一所には仏画を安置したと考えられるが、奉安された図像については不明である[14]。皇龍寺中金堂には丈六尊像など、19躯を安置する構造が発掘で確認されているが、東・西金堂にはどのような仏像を祀ったのか、あるいは行事がおこなわれていたのであろうか。

梁正錫[15]は、王宮の概念のもとで、魏の文帝が洛陽遷都とともに太極殿と同時期に東西堂を造成し、この建物は、太極殿の左右で皇帝の日常的な政務だけでなく、各種行事がおこなわれる補助的な役割をなしていたことをあきらかにした。また、皇龍寺再建の過程で新たに造成された金堂の平面構造が、皇帝の居住空間として知られる太極殿と同一形態であったという点をあきらかにしている[16]。しかし、都城が整備される過程で、新たに宮廷が整備されるなかで問題が生じるとすぐに、皇龍寺は一部計画変更した状態で造営されたか、あるいは新たに受容した都城計画にもとづき造営されたとみている。皇龍寺創建期の回廊によって区画された３棟の建物は、再建過程で回廊が撤去されるとともに、東西の建物は間口７間に縮小されるが、中央の建物は拡大した構造へと変化する。東西に配置された建物も、やはり太極殿と関連した宮殿配置構造にあわせて造成された可能性があると考えた。したがって外見上、再建伽藍は木塔を除けば、太極殿の東西堂からなる、中国南北朝時代の宮殿の構造と同じであると考えている。また、新羅下代にもみられる西堂の記録として、また別の太極殿が存在する可能性も提示し、東西堂制度が隋代に至り廃止されている状況で、なぜ後代まで存続したのかという点について、疑問を提起している。

すなわち再度要約すれば、東西堂制度が消滅する段階に、新羅の真興王は、この制度をもとに宮殿を造ったが、仏殿への変化にともない太極殿としての役割はなしえず、新たな太極殿のような精舎建物がどこかにあったと推定される。しかしその位置、あるいは造成計画は現時点ではわからないため、新資料の発見を期待して論を終えている。

真興王が当初は王宮を計画するなかで、３棟の建物を並列して配置することを基本原理としたならば、梁正錫の見解通り、東西堂を備えた太極殿を意味していたとみることができる。創建期には、中央建物両側を南北回廊で区画し、その東西に相当な規模があったと推定し、百済弥勒寺のような「三院式三金堂」の配置形態として理解しようとした[17]。

梁正錫が指摘した構造は、蘇州にある重玄寺の構造とも関連する。一列配置と東西に各種付属建物を配する様子は、皇龍寺初期伽藍とも関連づけることができる。ところが今の解釈では、王宮の概念と仏教寺院建築の概念が常に混在しながらあるため、両者の判別は不可能である。王宮から寺院への変更にともない、丈六尊像など19躯の尊像を祀る寺院の




**第9図　韓国・中国・日本の古代伽藍配置の比較図**（국립문화재연구소・경주시 2011、p. 42引用）

構造に変わるが、東西の建物の用途－本尊を祀っているが、金堂の役割をする東西金堂をなぜ維持しようとしたのだろうか。太極殿の役割もできず、東西堂制度も消滅したが、なぜ三金堂構造を維持しようとしたのだろうか。

真興王が皇龍寺建立を試みた目的は、王権強化であったということは充分に理解されている[18]。王宮と仏教を組み合わせ、建築にどのように反映させたのか、真興王の意図を複合的に考える必要がある。真興王は「王即仏」、すなわち中金堂に釈迦牟尼を祀るとともに、その東西金堂を、自分と息子のための施設として計画することで、王権強化を宣明することができた。具体的な意味を考えると、東は銅輪太子のための－東宮の概念をもった、あるいは太子のための礼拝施設として、西は転輪聖王である自分自身のための施設と捉えると、三金堂の概念と一致する。しかし、銅輪太子が死去（572年）して長子継承がなされなくなるとともに、王権強化に揺れが生じた。やがて真智王が４年ほどで廃位すると真平王が即位することになる。これは嫡流－長子継承を続け、再び王権強化という体制整備がおこなわれるようになったと理解することができる。

真平王の登極は、王権の再確立が優先的な目標であり、名分を立てることであった。その名分を裏付けるものが天賜玉帯である。即位年に天からもたらされた玉帯はすなわち、王権の象徴であり、天命を受けて統治する支配者を意味するとみることができる。郊社や宗廟の大きな祭祀の際には、これを着装したとされる。つまり、皇龍寺の丈六尊像、皇龍寺の九層木塔、天賜玉帯は、新羅の三宝であり、そのうちの二つは皇龍寺そのものであったのである。

皇龍寺に丈六尊像金堂が完成した後、東西金堂の役割はどのようなものであったのだろうか。前述したように、東金堂が太子のための東宮の意味を持つならば、それにあった仏殿が造営されるか[19]、『三国遺事』の記録通り、東竺寺の三尊仏を祀った可能性が高い[20]。そうであれば、西金堂の役割は、王を象徴する－真興王の系譜を正統に受け継いだ真平王が仏殿を造営するというよりは、自身の王権強化の重要な証拠である天賜玉帯を保管する場所とした可能性を提示したい。もちろん推論であるため断定はできないが、三金堂造営の一つの案として示すものである。

三金堂の中央金堂には丈六尊像を迎え、東金堂には塑像丈六尊像（あるいは薬師如来仏）、西金堂には天賜玉帯の保管場所として、王権の象徴を示す姿で展開した。以後、645年に造成される九層木塔は新羅三宝として、皇龍寺の完成を示す、新羅都城においてもっとも重要な場所であることを証明しているといえよう。

天賜玉帯の保管場所については、新羅後代に皇龍寺と関連した記録が伝わっている。『三国史記』新羅本紀景明王５年（921）に天賜玉帯の逸話が伝えられている。90歳を超えた皇龍寺の老僧によると、新羅三宝の一つであるこの玉帯は真平大王が身に着けていたも

ので、代々伝わり「南庫」に保管しているという。以後天賜玉帯は、937年の高麗王朝成立前まで保管されていた。

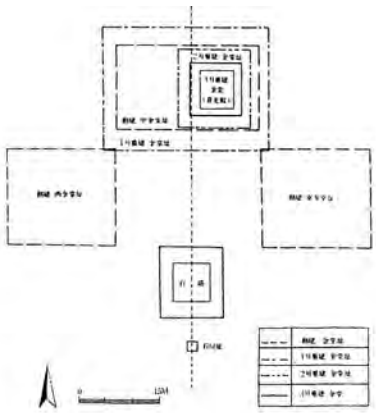
第６図にみられるように、初期伽藍では倉庫施設が備わっておらず、真平王が当初から「南庫」に保管していたとみることはできない。王権強化の象徴である天賜玉帯が、真平王が即位した579年から約300年余りの間、西金堂に継続的に保管できなかったと推定される。金春秋へ連なる真骨系への王権変化、８～９世紀代の王権の弱体化に起因する象徴性の欠如、朴氏王への交代（神徳王912年）、金堂の修復、仏教界の教義（禅宗などの導入）の変化と皇龍寺内の様々な変化などの理由により、時期はわからないが、保管場所の変更は当然なされたと考えられる。しかし、もっとも重要なのは、新羅滅亡まで皇龍寺に保管されていたという点であり、皇龍寺とともに新羅三宝を代表する遺物として、その保管場所と象徴性において、西金堂が最適の場所であった可能性を指摘する。

## ３．芬皇寺と皇福寺

### （１）芬皇寺三金堂の造成

法興王14年の527年に仏教が公認された後、真興王と真智王、真平王を経て善徳女王、真徳女王まで、『三国史記』と『三国遺事』にみえる寺院は45ヵ所にのぼる。このなかでも「皇」が入る寺院は皇龍寺のほか、芬皇寺と皇福寺である。したがって、王権の象徴を示す両寺院についても検討をくわえる。

芬皇寺は善徳女王３年の634年に創建された。発掘の結果、創建当時の伽藍は金堂の構造が「品」字型となる独特な構造だったことがあきらかとなった。このような構造は皇龍寺とは異なるもので、やはり高句麗清岩里廃寺のような系譜を引くという見解も指摘されたが、独創的な新羅式伽藍の出現という点をより意義づけている[21]。再建の時期と三金堂の維持などについては、『三国遺事』に記された、755年に大型の薬師如来仏を安置するとともに東西金堂を撤去した可能性[22]と、千手大悲観音菩薩壁画の存在を示す記事から、維持されたとみる見解がある[23]。



第10図　芬皇寺の伽藍変遷図

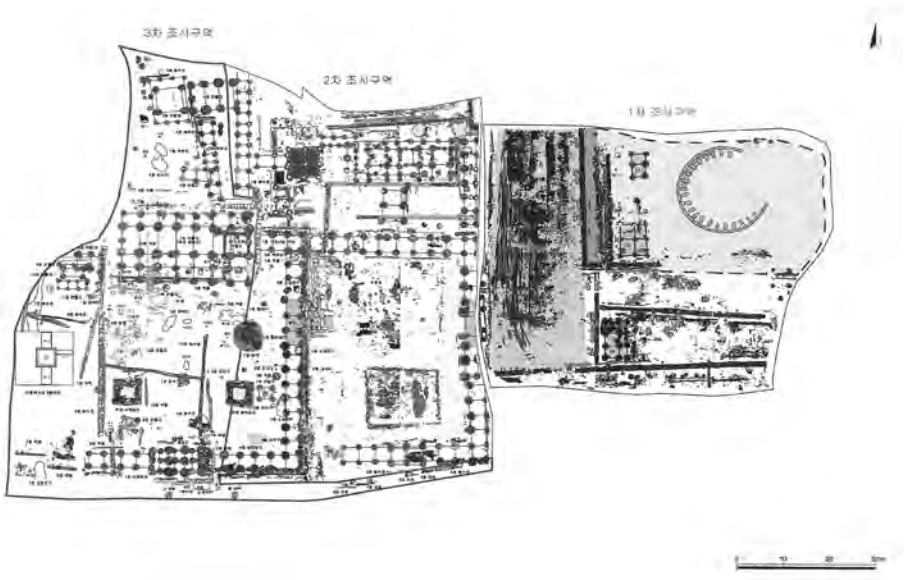
金堂は皇龍寺三金堂のように三金堂として造成されたが、構造が異なる。では、なぜ両者に違いが生じるのだろうか。もし真平王に息子が生まれていたら、「王即仏」の概念から、釈迦牟尼の系譜を引く一列配置の三金堂をそのまま造ることもできる。しかし、善徳女王は釈迦族の公主であったために、本尊とは同格にすることはできなかっただろう。よって中央金堂は北

に、東西両金堂はその下、南に配置した可能性を提示したい。真徳女王以後の聖骨系譜の断絶は、「王即仏」の系譜もまた継承できない状況となり、以後、寺院は一金堂二塔の型式として発展してゆく。芬皇寺は皇龍寺のように、三金堂の北、同一軸線上に講堂は造営されていない。東方の蓮池とともに造成される金堂と造営方位が異なる長舎状の建物が残存するが、性格が異なる。つまり芬皇寺は王のための願刹の性格を有する寺院であったとみるべきであろう。

**（2）皇福寺の造成と諸問題**

慶州狼山（史跡第163号）は皇龍寺東南辺に位置し、善徳女王陵、四天王寺、陵只塔など、新羅の主要遺跡が密集する地である。2016年以降、狼山整備事業の一環として、皇福寺三層石塔（国宝第37号）周辺の発掘調査が（財）聖林文化財研究院によって進められている。2016年には統一新羅時代の王陵の護石が発見された地点を中心に全面発掘調査をおこない、未完成の石材および建物や道路遺構を確認した。2017年には塔が位置する西側へ調査範囲を拡張し、皇福寺金堂基壇と十二支神像、付属建物と回廊遺構などを、2018年から2019年５月までに、統一新羅時代の十二支神像基壇建物、大型金堂、回廊、排水路、方池などの遺構と、金銅仏立像など1,400点余りの遺物を検出した[24]。

『三国遺事』には真徳女王８年のAD654年、義湘大師が皇福寺で出家したという記録があり、1942年の皇福寺三層石塔修理時、金製如来坐像（国宝第79号）と金製如来立像（国宝第80号）が発見された。金銅舎利盒蓋の記録には、「神文大王が692年に薨去されたため、神穆王后と孝昭大王は宗廟の神聖な霊のため、三層石塔を建て（宗廟聖霊禅院伽



**第11図　皇福寺一円の発掘区域**（１～３次）

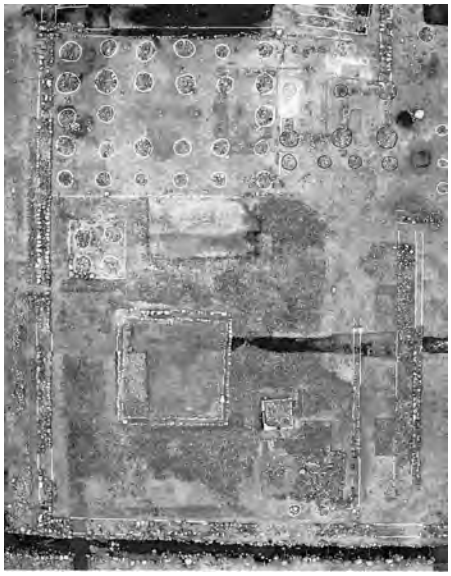
**第12図　皇福寺金堂**（１号と２号建物の重複状態）

**第13図　皇福寺２号建物（１間）の細部**

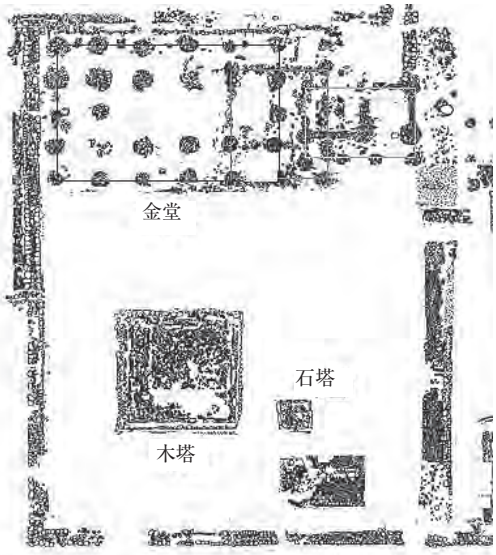
藍)、.....聖徳王５年の706年、仏舎利４と、純金製弥陀像１躯と無垢浄光大陀羅尼経１巻を石塔２層に安置する」とあることから、７世紀中盤には既に皇福寺が建立されていたと考えられる。

調査団は、2016年の調査時に確認された十二支護石が34代孝成王（在位737～742年）の未完成の石材であると推定した。また、金堂と推定される１号建物は、間口７間、奥行４間で、東西28 m、南北16 mを測り、統一新羅時代以前には、推定東－西木塔と中門、南回廊などの遺構を南－北線上に配していたと報告した。以後、統一新羅時代に至ると、皇福寺三層石塔と東・西亀趺１・２号大石壇および回廊、雑石などの遺構が、高麗時代には礎石建物および関連施設が存在していたと考えている。しかし、現時点で確認されている第12図の１・２号建物は、その内部の基壇石列とほかの根石などが残存しており、少なくともここで３回以上の改築があったことがわかる。よって根石の前後関係は再考する必要性がある。第13図の２号建物は、間口１間、奥行１間で、柱間間隔が500 cm に達し、１号建物の廃棄後は、２号建物のみが残り、存続していたと報告されている。つまり略報告書によると、金堂の役割をする大型の建物が消え、１間規模の建物のみが塔と回廊とともに存在したということであるが、綿密に検討する必要がある。１号建物内部に別途、１間規模の根石をもつ建物を設ける構造の比較資料が、９世紀代のＳ１Ｅ１王京遺跡の第１家屋（第14・15図の寺院構造）でみられる[25]。

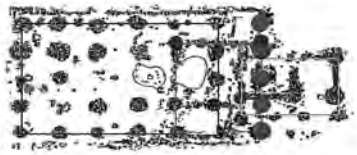
この遺構は皇龍寺東方の王京都市遺跡内に位置する。木塔横に小型石塔が配され、その北方に金堂が造られる。講堂や回廊がともなわない構造から、貴族の願刹と推定される。発掘調査の際に、皇福寺と同様、重複するように内部に１間規模の建物の根石が確認された。両者を時期差として考えたが、皇福寺と同様の構造であることを勘案すると、再解釈が必要である。王京第１家屋金堂は、報告書には間口５間とあるが、身舎３間を再度検討すると６間規模となり、内部に１間規模の方形建物がある。報告書には、前方に束柱があ



**第14図　9世紀代の王京Ｓ１Ｅ１地区第１家屋（寺院型）金堂内の重複構造**



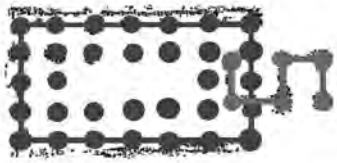

**第15図　王京Ｓ１Ｅ１地区第１家屋図面**
（皇福寺址と重複構造が類似）



**第16図　王京第１家屋の間口６間の復元**

**第17図　王京第１家屋の重複状態**
（２棟の小型建物が重複した形態）

**第18図　王京第１家屋の重複・併存状態**（１次）



**第19図　王京第１家屋の重複・併存状態**（２次）

り、重複関係からみて、大型金堂より先に築造されたと解釈されている。ところが金堂の身舎を検討すると、従来の解釈である５間ではなく６間となり、その内部に方形の建物が造られる状況は、皇福寺１号建物と非常に類似する。両者ともに金堂の役割をなし、その内部に方形吹放し構造の根石が重複する様相は、偶然というよりは建築自体に再解釈の余地があると考えられる。

このように重複する建物は、金堂築造前に既にあったが廃棄された施設である可能性と、従来の寺院構造とは異なる願刹、あるいは特殊な配置（皇福寺）として、金堂内部に別途、

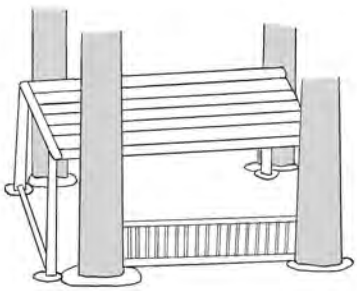
第20図　讃岐国分寺遺跡の僧房遺構

第21図　讃岐国分寺遺跡の僧房復元模型

僧房のような性格の構造物が造られ、両者が併存していた可能性も考えられる。このような僧房の構造は、第20・21図にあるように、日本の讃岐国分寺遺跡（741年建立）で類似する様相がみられるため紹介する。この遺構は、礎石間に長い石列ないしは磚を連結させており、僧房の区画と施設のために構築されたものである。新羅王京でも、このような列状を呈する根石が一部確認されており、僧房とともに区画施設の基礎である可能性が高い。

つまり、皇福寺や王京Ｓ１Ｅ１地区で確認されている金堂内施設は、時期差ではない可能性が示唆される。金堂内の待機施設、あるいは関係僧侶の居住施設として併存していたと考えられる。つまり、建物内部に低い天井施設を設置するには、別途柱を立てる構造となることから、金堂内に設置されたと推測するものである。現時点では第22図の模式図のように復元しているが、礎石相互の関係と構造については再考する必要があり、古代建築物の復元試案についても多角的に研究する必要がある。

また、皇福寺内の東西木塔という場所から宗廟の祭儀施設である可能性も指摘されているが、中央に心礎を置いていない点、下部の根石が重複している点から、その時期は統一新羅時代以前に遡及しえない点を考慮する必要がある。中門入口に位置する亀趺は原位置をとどめていないが、寺域内部の各種建物と相応しい構造物として、統一新羅時代後代の遺物であることを考慮しなければならない。



第22図　金堂内重複構造模式図

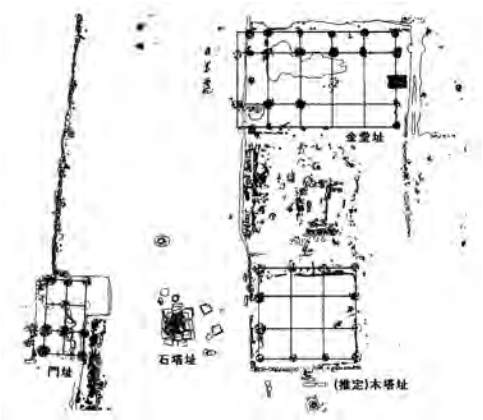
くわえて、７世紀後半から８世紀代前半に建立されたと考えられる皇福寺三層石塔の現在の位置もまた、初期の伽藍配置とはまったく合致しない。つまり、当該期の慶州の寺院－四天王寺、感恩寺、望徳寺、仏国寺などによるならば、一金堂二塔の型式がもっとも一般的である。発掘略報告書には、土層調査をもとに現在の石塔の位置が初築であるとしているが、ほかの場所

で造成されたが、現在の位置に移設されたと仮定しても、石塔が位置する地点は、当時は建物を造成するには困難な丘陵地であったため、土層調査では当然のことながら、初築の痕跡のみを確認するにとどまっている。石塔が金堂と一直線ではなく、東西方向に偏って位置する伽藍配置は、慶州南山や平地でみられる望塔－金堂や寺院のほかの付属施設よりも高所に位置－あるいは、舎利塔の概念を反映している。

このような伽藍配置は、８世紀後半代から９世紀代を中心とする天官寺も同様で、西南部に石塔が配される構造となり、９世紀代のＳ１Ｅ１王京遺跡第１家屋構造（第15図）でも石塔を木塔の東横に配置する点と類似する。（伝）仁旺寺の場合にも、既存の建物上に新たな寺院を建立し、また慶州南山に数多くの寺院が入植する時期が９世紀代である点を鑑みれば、仏教の思想的な変化とともに塔の位置が変化することがわかる。

皇福寺の略報告書では、中門などで６世紀代の土器が出土することから、上限年代を遅くとも７世紀とみているが、全体的に出土する軒丸瓦の中心時期は９世紀代であることを考慮する必要がある。

以上の状況から、皇福寺は９世紀代に至り石塔の移設とともに大々的な重建があった可能性を再考することができる。あるいは、石塔が現在の位置に初築（造成時期の問題はあるが）され、中門に取り付く伽藍配置を認めるならば、８世紀代後半代以後に寺院全体が新たに造営された可能性を指摘したい。つまり、現在の伽藍は記録にみられる７世紀代の皇福寺とはまったく別の寺院である可能性を示唆している。特に塔－金堂－講堂と連なる普遍的な寺院の系譜ではなく、王族や貴族の願刹のような構造を帯びている点を考慮しなければならない。




第23図　天官寺の石塔と金堂配置

第24図　皇福寺出土軒丸瓦

## Ⅲ．結語

以上から、真興王の皇龍寺造成は意図的な計画の下、「王即仏」の概念で一列に配置される三金堂を築造し、これは真平王と善徳女王、真徳女王の系譜まで継続していたことを論じた。善徳女王もやはり釈迦族の公主であり、聖骨系統を継承する者として三金堂を造成したが、女性という限界から、「品」字の配置型式－東西金堂が一段格下の姿となり、講堂が造成されない願刹の性格を帯びていたとみることができる。以後新羅社会において、このような三金堂配置が造成されなかったのは、王権と仏教の思想的な変化が要因として反映されたと考えなければならないだろう。

絶対王権の象徴を示す皇龍寺中央金堂には丈六尊像を、東金堂には塑像丈六尊像（あるいは薬師如来仏像と弥勒菩薩・地蔵菩薩）、西金堂には天賜玉帯を配することで「王即仏」を示し、善徳王645年に造成される九層木塔は、新羅三宝として皇龍寺の完成を示す、新羅都城においてもっとも重要な場所であることを証明しているのである。

付記　最近、皇龍寺西回廊西方地域における調査で、金銅製鳳凰装飾付海老錠など３点が出土したことから、重要な品物を保管する装置や施設などが設けられていたとみる見解が発表された（2020年11月25日文化財庁による報道資料）。これは、天賜玉帯を保管した南庫と関連する遺物である可能性が高いと考えられる。今後の発掘成果が注目される。

**第25図　皇龍寺西回廊西方地域出土 金銅製鳳凰装飾付海老錠**

註

1　本稿は以下の学術大会で発表した内容を修正・追記したものであることを明記しておく。이은석「신라 왕성의 중심, 황룡사」『경주 황룡사지 남쪽광장』정비 및 활용을 위한 학술대회、경주시・신라문화유산연구원、2020年。

2　北方に位置する芬皇寺との間の範囲でも精査はおこなわれておらず、西方でも、皇龍寺址展示館進入区域は発掘されなかった。西方の廃寺遺跡は1984年から1986年まで発掘がおこなわれたが、報告書が刊行されていないため、正確な様相を把握するのは難しい。

3　皇龍寺を中心に都市区画が開始されたという点はこれまで大きな異論はなく、皇龍寺が位置する地点については、以下の拙稿において既に言及してきた。これを再整理したものが2016年の発表資料集に所収されている。李恩碩「新羅王京の都市計画」『東アジアの古代都城』創立50周年記念 奈良文化財研究所学報第66冊、研究論集ⅩⅣ、奈良文化財研究所、2003年。李恩碩「왕경의 성립과 발전」『통일신라시대고고학』제28회 한국고고학전국대회발표집、2004年。李恩碩「상주 복룡동 유적과 경주 왕경」『嶺南文化財研究』24、嶺南文化財研究院、2011年。李恩碩「황룡사 건립과 신라 왕경의 조

성」『황룡사지 발굴조사 40주년 기념 국제학술대회 발표자료집』문화재청・국립경주문화재연구소、2016年。

4 李恩碩「7세기대 신라 가옥구조에 대한 고찰」『新羅史學報』제37호、新羅史學會、2016年。

5 裴秉宣は、建物の中軸線が西に振れる状況は益山王宮里遺跡でもみられ、洛陽城では太極殿と東西堂、寝殿などの中心建物群は南北中軸線上に一列に位置するが、中軸線は西にやや偏っており、南朝の建康宮城とも類似すると指摘している。배병선「익산 왕궁성과 백제 건축」『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城』국립부여문화재연구소、 2014年、pp. 155－156。

6 新羅文化遺産研究院による皇龍寺南辺地域の広場と都市遺跡の発掘成果から、周辺道路遺構の年代が皇龍寺築造以前まで遡及しないということは、皇龍寺が都市区画の開始であったことの証明だとみることができる。경주시・신라문화유산연구원『慶州 皇龍寺 廣場과 都市Ⅱ』、2020年。

『三国史記』には、AD469年に坊里名を定めたという記事があることから、5世紀代に“坊”で構成された都市の建設の可能性を指摘する研究者もいる。しかしこれまでの慶州における数多くの発掘で確認されていないことから、「坊里名を定めた」という意味は、現在の住居を付与した、すなわち、村落の名称がないか、把握が困難な村の名前を定めたという意味だとみるべきであろう。

李東柱は、それ以前とは異なる行政的な単位区画の一端が開始したことはあきらかだと述べる。近年里坊制として使用される用語もそれなりの意味があると考えるが、郡県制式の上位行政区域による造語的なニュアンスをぬぐい切れないとし、坊制もやはり、全体を反映できていないという限界を指摘している。이동주「신라 왕경의 정의와 그 범위」『문헌으로 보는 신라 왕경과 월성』국립경주문화재연구소、 2017年、pp. 105－111。

7 妹尾達彦「隋唐長安城と関中平野の土地利用－官人住居地と墓葬地の変遷を中心に－」『都市と環境の歴史学　第3集 特集 東アジアの都城と葬制』中央大学文学部東洋史研究室、2015年、p. 40。

8 蘿井の問題点については、以下の拙稿で詳述している。『新増東国輿地勝覧』にみられる、慶州南方7里にあるという記録が問題提起されずにそのまま認識され、伝えられてきたが、2004年の発掘成果による学術大会でその位置と造成時期、建築物の構造など、複数の問題提起がなされた。ところが、報告書にそのまま蘿井として認識されるようになると、現在の研究者はそれを全面的に受け入れているのが実情である。現在の蘿井が奈乙神宮につながり、月城（王宮）北西部の鶏林北方に位置する回廊形建物を宗廟として認識する傾向がある。これは王宮と儀礼空間の基本的な位置概念とまったく合致していないということを理解していない。이은석「신라 왕경 발굴의 과제」『新羅史學報』제5호、新羅史學會、2005年。

9 慶州盆地は立地上竜巻が発生しやすく、皇龍寺の発掘現場でも何度も経験した。現在の自然条件とは異なるが、古代には竜巻が昇天の意味をもち、黄龍出現に意義づける条件であったと考えることができる。

10 申東河は、普段この地が龍神信仰の対象地であったと考えている。신동하「신라 佛國土思想과 황룡사」『신라문화제학술발표논문집』22、2001年。

芬皇寺と皇龍寺間にある龍宮の位置問題について、復元整備された大型の井戸が龍宮だという筆者の見解に対する異論はない。築造時期は推定できないが、筆者が整備事業の一環でその内部に入った際、井戸内部の直径は約3mに及び、明活城と同様に、花崗岩による割石を組み合わせて積み上げている状況を観察した記憶がある。地上側の入口から2mほどまでは、礫で組み上げられており、近代まで使用されたために複数回改築がおこなわれている。この龍宮問題を解決するには、この井戸の正式発掘（皇龍寺発掘後、整備事業のみがおこなわれたために、その深さや築造方式については把握されていない）によって、築造時期を把握することが非常に重要であり、芬皇寺間の未発掘地域を調査すべきである。이은석「황룡사 북편 용궁에 관한 일고찰」『중헌 심봉근선생 고희기념논선집 동아시아의

문물』、2012年。

11 朱甫暾は、真興王は新宮を建立することができなかったが、皇龍寺に変更する際に、僧侶恵亮から諮問を受けたとみている。주보돈「皇龍寺 創建과 新羅 中古期 皇龍寺의 位相」『황룡사지 발굴조사 40주년 기념 국제학술대회 발표자료집』문화재청・국립경주문화재연구소、2016年。

12 新宮あるいは皇龍寺建立が王権強化の意味であったと解釈する点については異論がない。

13 中国における仏教寺院配置構造の理解のため、本文中の内容と図面は、すべて以下の論文から引用した。隋唐代の仏教寺院の全体的な変化の様相を詳細に記述しており、三国との比較に大変参考になる。王貴祥「수당시기 불교사원」『백제사찰연구』국립부여문화재연구소、2013年。

14 趙由典「皇龍寺 三金堂考」『石堂論叢』20、1994年。

15 太極殿と東西堂に関する内容は、以下の著書から引用した。양정석『한국 고대 정전의 계보와 도성제』서경문화사、2008年、pp. 35－70。

16 梁正錫「皇龍寺 中金堂의 造成과 丈六尊像」『先史와 古代』12、1999年、p. 293。

17 皇龍寺の発掘資料を新たに解釈しながら、西側建物（西金堂）が再建金堂より前に造成された可能性があるとして、中金堂が丈六尊像を安置するとともに、東西の建物（東西金堂）が築造されたと考えている。양정석『황룡사의 조영과 왕권』서경문화사、2004年、pp. 55－93。

18 최선자「신라 황룡사의 창건과 진흥왕의 왕권 강화」『韓國古代史研究』72、한국고대사학회、2013年。

19 東宮が東方浄土の概念を象徴するのであるならば、ここには薬師如来仏と弥勒菩薩および地蔵菩薩を祀る場所として、現世を変え、未来の世界を迎える意味で、当時真興王が夢見た仏国土の造成と現世で富国強兵の発願を込めたと推論することができる。

20 東西金堂の仏像安置については複数の見解があるが、最近東金堂で塑像仏の指が公開されたことから、574年から645年の間に建立した建物内に塑像丈六尊像が安置されていたと考えられる。김동하「중금당은 청동불, 동금당에는 소조불－설명칼럼」『특별전 皇龍寺』、2018年、p. 160。

21 유홍식「芬皇寺 伽藍配置와 變遷에 관한 고찰」『특별전 芬皇寺 출토유물』국립경주문화재연구소、2006年。

22 趙由典・南時鎭「芬皇寺發掘調査報告」『文化財』제25호、1992年、p. 182。

23 李康槿「芬皇寺의 伽藍配置와 三金堂 形式」『芬皇寺의 諸照明』、新羅文化學術發表會 論文集 第20輯、1999年。

24 皇福寺に関する全体的な内容は、以下の拙稿を修正および再編集して記述した。이은석「신라　도성의 구조와 성곽 조사의 성과」『계간 한국의 고고학』vol.46、주류성출판사、2020年、pp. 24－25。

25 국립경주문화재연구소『新羅 王京 발굴조사보고서』、2002年。

**参考文献**

경주시・신라문화유산연구원『慶州 皇龍寺 廣場과 都市Ⅰ』、2018年。

국립문화재연구소・경주시『황룡사 복원 고증연구』황룡사연구총서 8、2011年。

국립경주문화재연구소『문헌으로 보는 신라의 왕경과 월성』、2017年。

국립문화재연구소・국립경주문화재연구소・경주시『황룡사 복원정비사업 발굴조사Ⅰ－중문지・동문지 등』、2018年。

국립경주문화재연구소『皇龍寺 발굴조사보고서 Ⅱ －동회랑 동편지구』、2019年。

국립경주박물관『특별전 皇龍寺』、2018年。

(재)성림문화재연구원「경주 낭산 일원 내 추정 고분지 정비 유적 3차 문화재발굴조사 약식보고서」、2019年 6 月。

김숙경「황룡사 건축과 남쪽광장」『경주 황룡사지 남쪽광장』(정비 및 활용을 위한 학술대회) 경주시・

신라문화유산연구원、2020年。
妹尾達彦、崔宰榮역「唐代洛陽 －새로운 연구동향」『中國歴代都市構造와 社會變化 동아시아학술연구총서』 2 、서울대학교 동아문화연구소、2003年。
妹尾達彦、최재영역『장안은 어떻게 세계의 수도가 되었나』황금가지、2006年。
妹尾達彦「隋唐長安城と郊外の誕生」『東アジアの都城の比較研究』京都大学学術出版会、2011年。
妹尾達彦「日本 古代都城의 儀禮空間과 王權의 位相」『韓國古代史研究』71、韓國古代史学会、2013年。
妹尾達彦、이은선・이하얀역「동아시아 도성과 궁원구조 －7～8세기를 중심으로－」『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城』국립부여문화재연구소、2014年。

# 황룡사 건립과 운영에 관한 고찰

이 은 석

**요 지** 진흥왕이 새로운 왕궁을 건립하고자 한 것은 강력한 왕권을 구축하는 새로운 세계, 즉 본인이 천자의 역할을 한다는 의미를 내세우는 것이었다. 왕궁 건립은 도시계획의 시발점이자 중심지였고, 중국 도성계획의 개념을 차용하였지만 신라 특유의 도성으로 발전하게 된다.

진흥왕이 황룡 출현을 계기로 왕궁에서 사찰로 변경한 것은 불교를 국교로 삼고 '왕즉불' 사상을 구현하는데 더욱 부합되었을 것으로 판단된다. 황룡사 건립은 신라사회의 대변혁을 불러일으키는 대역사였다.

사찰건축에서 중국이나 일본에서는 보이지 않는 일렬 배치의 삼금당은 진흥왕의 의도를 충분히 짐작할 수 있다. 중앙금당은 장육존상을 봉안하고, 동금당은 왕세자를 위한 동궁의 의미를 부여한 시설을, 서금당에는 그를 위한 시설이 조성되었을 것이다.

그러나 이 구도는 진평왕대에 이르러 완성되었을 것으로 추정된다. 진지왕 폐위 후 장자계승의 당위성과 왕권 강화의 결정체인 천사옥대를 보관하는 장소로 서금당이 그 역할을 완성하였을 것으로 추정한다.

분황사는 선덕여왕을 위한 사찰로 건립되지만 여자라는 한계-석가족의 공주이기 때문에 동서금당의 격이 중앙금당보다는 한 단계 내려오는 모습인 '品'자 배치 형식으로 조성되었고, 성골계가 막을 내린 이후 신라사회에서 이러한 삼금당 배치는 더이상 조영되지 않았다.

절대 왕권의 상징을 보여주는 황룡사 중앙금당에는 장육존상을, 동금당에는 소조장육존상(혹은 약사여래불상), 서금당에는 천사옥대를 봉안하여 '왕즉불' 사상을 구현하며, 선덕여왕 때인 645년 조성되는 구층목탑은 신라 3보로써 황룡사의 완성을 보여주는, 신라 도성에서 가장 중요한 장소임을 증명하고 있는 것이다.

**주제어 :** 황룡사, 삼금당, 천사옥대, 분황사, 황복사

# A Study on Construction and Operation of Hwangnyongsa Temple

**Lee Eunseok**

**Abstracts:** King Jinheung originally planned to build a new royal palace in order to highlight his role as the son of heaven in the new world of powerful royal authority. The construction of the royal palace was the starting point and center of city planning. The construction followed the model of capital city plan of China, but later a capital city unique to Silla was built.

We deem King Jinheung's decision to change from a palace into a temple at the sight of a yellow dragon was in line with his intention to adopt Buddhism as a state religion and realize the idea of "the king is the Buddha". The construction of Hwangnyongsa Temple was an epic event that revolutionized Silla.

Layout of Three Main Buildings of Temple arranged in a straight line that was nonexistent in temple architecture in China or Japan at the time is a sufficient indicative of the intention of King Jinheung. We presume that the Central Main Building of Temple enshrined the Jangyukjonsang statues(Sixteen-foot Gilt-bronze Buddha statues), while the East Main Building of Temple was for facilities representing the place of the Crown Prince and the West Main building of temple was for facilities for the Crown Prince.

However, we estimate this plan was brought to completion during the period of King Jinpyeong. Presumably, the West Main Building of Temple fulfilled its role as a place to keep the Jade Belt bestowed by Heaven, which symbolizes the justification of succession of the firstborn and the reinforcement of royal power after the demise of King Jinji.

The Bunhwangsa Temple was built for Queen Seondeok, but since she was a princess of the Buddha family, not a prince, that is, the limitation of women, Three Main Buildings of Temple were arranged in the shape of Chinese character '品' in which the East and West Main Buildings of Temple were placed one level below from the Central Main Building of Temple. After the end of Sunggol class(the highest patriciate), such layout of Three Main Buildings of Temple were no longer constructed in Silla.

Hwangnyongsa Temple representing absolute power of royal authority where the idea of "the king is the Buddha" was embodied by enshrining the Jangyukjonsang statues in the Central Main Building of Temple, the Jangyukjonsang clay figure (or Bhaisajyaguru) in the East Main Building of Temple, and the Jade Belt bestowed by Heaven in the West Main Building of Temple, and the Nine-tiered Pagoda Wooden as one of the three national treasures of Silla was built in the 645 th year of Queen Seondoek's reign proves to be the most important site in the capital city of Silla.

**Keywords:** Hwangnyongsa, Three Main Buildings of Temple, Jade Belt bestowed by Heaven, Bunhwangsa, Hwangboksa